

February

京都教師塾通信
No.8

令和3年2月26日

学びの広場

京都市教育委員会 教員養成支援室

第15期

「京都教師塾」

第7回の専門講座は動画視聴の形で実施しました。レポートを見ると、希望校種・職種に関する専門的な知識や実践を多く学ぶことができたようです。また、他校種・職種に関心をもち視聴する塾生もいました。



「高等学校における教師の実践」

講師：学校指導課

岡本 弘嗣 指導主事



今回の講義を通して、教員になるにあたって重要だと感じることは大きく3つある。

まずは、自らの主体性と努力によって、チャンスを最大限活用することだ。偶然を待っていたりチャンスを避けたりしては、教師として成長することはできないだろう。また、教師は仕事を待っていたり、他の先生から指示されたことを実行したりするだけではもちろん不十分だ。常にアンテナを張り、進んで仕事をする姿勢が重要だ。教育実習に言った際にも、自ら先生の手伝いをするなど、主体的な姿勢と実行を大切にしていきたい。生徒に主体的な態度と行動を呼びかけているのに、教師が受け身であってはならないと考えた。

次に、授業によって構築されると言われていた信頼関係だ。教師は生徒との間に必ず信頼関係を構築していかなければならない。日常、生徒と会話などをする中で構築される信頼関係もあるだろう。しかし、しっかりとした授業ができないでは、折角構築している信頼関係は簡単に崩れてしまう。生徒からの信頼の根底には、日々の授業や生徒対応があると考えた。信頼関係を構築し、生徒と共に学ぶ姿勢を保ち続けるために、専門科目の知識を身に付け続けていきたい。

最後に、新人教師に特に必要な力についてである。生徒や保護者などからの質問で、判断に迷うことは多々ある。そこで、自分一人で判断せず、先輩教師に相談して行動することが必要だと学んだ。現場で間もない頃は、一人で間違った判断を下してしまったり、取り返しのつかないことになってしまうかもしれない。そうしたことを防ぐためにも、報・連・相が重要だと考えた。そして、経験したことを次の判断に生かせるようになっていきたい。

現在、教師になる前の段階の私の課題は、専門科目の知識を増やすことだ。これは教師になった後も課題となるであろうが、授業力向上に向けて日々努力していく。

高等学校では、小中学校とはまた違い、様々な地域から、今まで知らなかった生徒同士で学級が編成されます。また、進路選択は個人の問題であるために、つつい自分本位に物事を考えがちにもなってしまいます。そんな年頃に、お互いの進路を思いやり、支えあいながら集団生活を送ることができるような、学級経営が肝心となります。道徳の授業はありませんが、岡本先生もおっしゃっていたように、様々な場面で道徳教育は行われていることは、忘れないでください。



「総合支援学校における教師の実践」
講師；総合育成支援課
稲岡 義徳 指導主事



今回、第7回の講座を通して、総合支援学校について詳しく学ぶことができました。また、その中でも「一人一人の子どもを大切にすること」がとても大切だと思いました。総合支援学校では、障害の種類は同じであっても一人一人が違い、その一人一人に合った指導やかかわり方をすることがとても重要だと思いました。そして、障害のある生徒はどうしてもできないことが多くあると思いますが、そこを「～すれば～できる」と子どもの姿を前向きに捉え、子どものできること、わかること、子ども自身がやりたいと願っていることに着目し、できるようになる支援を考えることが教師の役目だと思いました。そしてここから、生徒に達成感、成就感を与えることがとても大切だと思いました。

また、総合支援学校では、指導者・保護者・関係機関との「連携」、子どもの情報・指導や学習などの取組の経過・評価・必要な支援・手だてなどの「引継」、目標や課題・指導の方法などの「共有」、この3つがとても大切だと思いました。

今後に生かすこととしては、日常生活の中で、障害のある方と接することが少ないので、障害のある方が参加されるイベントなどに参加し、良いコミュニケーションの取り方や支援の仕方などを学んでいきたいと思いました。また、通常学級にも発達障害のある生徒がいると思うので、知識もより深めていきたいと思いました。

総合支援学校は全ての学校でそうであるように、まさに一人一人を徹底的に大切にすることを具現化しています。しかも実態や課題を捉えるだけでなく、その子の姿を前向きに、できること・わかることから、できないこともどうすればできるか考え、子ども自身がどうしたいと思っているのか、どうありたいと願っているのかに着目し、支援を考えるのです。

ひとつひとつの達成感や成就感を日々子供や保護者とも分かち合い、子供の可能性を見いだすことが将来展望にもつながります。連携・引継・共有といった組織的な教育活動に気付いたことも大切なことですね。インクルーシブ教育にパートナーシップは欠かせないということも捉えておかななくてはなりませんね。



稲岡先生は教師塾4期生の大先輩です。当時のレポート集を大切に残しておられ、今もなお見返して初心にかえることができるとおっしゃっていました。

みなさんのレポートも学びが詰まった一つの「作品」であり、宝物になると思います。将来教壇に立った時にも、この教師塾での学びを生かしてもらえたら嬉しいです。





「もとめられる養護教諭像」
講師;体育健康教育室
岩本 順香 指導主事



今回の講義は、教員採用試験のことでいっばいいいばいだった私を、原点に戻してくれた。

やはり、養護教諭という仕事は魅力的で、この思いはきっと一生変わらない。しかし、「求められる養護教諭」でなければならない。時代によってそれは変化していくし、このコロナで痛いぐらい実感した。誰かと同じこと、今までと同じことをしているようではいけない。自分で考えて行動にうつすこと。そして、そこには必ず「連携」があること。養護教諭になりたいと思い始めた頃は、それが教師であることをあまり感じていなかった。しかし、教師塾に入って、様々な講義を受け、いろいろな人と話をしていく中で、教師として学校の中で動いていく自覚がもてた。救急処置、健康観察、保健指導、どれを行うにしても、学校という組織の中にいるということを忘れてはいけないと感じた。

講義の中で私が一番印象に残っていることは、「環境衛生活動」である。教員採用試験で環境衛生について問われるのは、ほぼ数字（例えば、「温度は $^{\circ}\text{C}$ 以上 $^{\circ}\text{C}$ 以下であることが望ましい」など）。しかし、頭をぶつけてしまいそうな角にクッションを付れたり、棚の上の水筒をもう少し低い位置に置くようにしたりするなど、「五感と想像力を働かせる」意味と大切さが分かった。

そして、養護教諭の1日の流れを知り、想像することもできた。子どもたちが完全下校した後、「今日もみんな、何事もなく元気だったな」とほっとする毎日。その毎日のために養護教諭がいるのかもしれない。養護教諭を目指す上で、大学の授業や参考書だけではどうにも埋めることのできない部分がある。そこで私は、バイト先である接骨院の患者の様子や関わりを今よりさらに意識したり、何事もただボーっと見るのではなく、背景まで考えたりして、つなげていきたい。

今回の講義で、養護教諭になりたいという思いが強くなり、自分の課題としっかり向き合っていくことができた。

自分の仕事の立ち位置をしっかりと理解されました。養護教諭には5つの職務があることを理解されたと思います。そして、何よりも子どもの生命を守り、心身の安全を図るためには、「的確な見極め・判断・対応」が求められますね。また、適切な応急措置ができることが、養護教諭としての信頼を得ることにつながるのだと思います。また、児童生徒の健康状態の日常的な観察が重要です。さらに、お話にもあったように、「五感と想像力」を働かせることが大切です。言うまでもありませんが、それは保健室に閉じこもっては見えてこないこともあります。視野を広くもってください。最後に岩本先生がお話されていた、「今のうちにしておくべきこと」「仕事をする上で大切にしておきたいこと」について、考えてみることも大切ですね。



「もとめられる栄養教諭像」
講師：体育健康教育室
小山 ひとみ 主任指導主事



料理を作らなくても生きていけるようになった今、子どもたちに将来正しく食を選択できる力を付けていかないといけないということ、このコロナ禍で改めて感じました。

そのために、一番子どもたちと関わる時間の長い担任の先生と、私はしっかり連携していくことが大切だと感じました。小山先生のお話にもあったように、給食は毎日あります。栄養教諭として、できるだけたくさんの子どもに給食時間に声かけをしていきたいという思いはありますが、一人で全校の児童を見ることはやはり難しいです。しかし、担任の先生は毎日そのクラスの子たちと給食を食べ、同じ時間を過ごします。そのため、その日の給食に込められた思いや、その日の給食時間に特に気をつけて指導したいことなどを、担任の先生と情報共有したり、指導用資料を提供したりすることも、子どもと直接関わることではないですが重要だと感じました。

また、「実践につなげる授業を」ということでも、食の課題や家庭の背景などを一番理解している担任の先生と進めていくことが大切だと思いました。そのためにも、自分自身が日々情報収集をして、担任の先生に「子どもに知って欲しい、伝えたい、授業で使いたい」と思ってもらえるように、学年の取組に耳を傾けながら、食に関する指導資料のプレゼンをしていきたいと、今日のお話を聞いて感じました。

このコロナ禍において、より「健康に生活していくために」「体調を整えるために」規則正しい食習慣、バランスのよい食事が重要となってきましたね。栄養教諭は各校に1人いる所も増えてはきましたが、まだまだ兼務が多い立場です。しかし、子どもに関わる食育については、本当にあれもこれもと内容が増えてきました。また、日々の給食についても、アレルギー関係で栄養教諭の関わりもとても重要です。命に関わります。

そのような栄養教諭の立場として、全校児童、保護者、教職員への働きかけをどのようにしていくかです。給食だよりや食に関する掲示物の工夫、教室を巡回しての給食指導、ランチルームでの給食指導等々、発信方法はいろいろとあります。

「子どもと直接関わることではないですが…」と考えているように、直接関わることができなくても発信はできます。子ども達が将来的にも健康に元気に過ごしていけるように、子どもの時から食を通して自分の健康について考えられるよう、栄養教諭として活躍して欲しいです。